植物のふしぎ（Ⅳ）

目黒修治

「どうもあいつは好きになれない」とか、「考えただけで、吐き気がする」とか、「あいつと一緒に居るくらいなら、死んだ方がましよ」。数多い人間関係の中には、誰でもこんなふうに思っている人が一人や二人はいるんではないだろうか。ま、あんまり過激では無いにしても、どうしても「リズムが合わない」人間関係はその辺にゴロゴロと転がっている・・・と思う。たぶん。反対に、「あいつと居ると楽しくなる」とか、「あいつとだったらガンバッテもいい」とか、、、いつも一緒に居たくなる様な人間関係も、また沢山有るんだな。特に、惚れてしまった女と男の間では、お互いに特別な作用が働いてしまうらしいけれど、これは少し特殊かもしれない。なぜかと言うと、「恋愛」とは、そもそも「美しき誤解」から始まっているのだから。

人間には、（それを見ることのできる人の言によれば）一人一人に、異なった形の異なった色の「オーラ」が出ているそうな。オーラの形や色は、その人の命の状態や心の動きによって絶えず変化するんだとか。例えば、肩を寄せて並んだ二人が、お互いに好感を持っているか否かは、オーラの状態に出てしまうんだと。（言葉でごまかしてもダメと言う事）チョット信じ難いけど、そんなことがあってもいいんじゃないか、面白いんじゃないかって気がする。

でもでも、植物の場合は「面白い」どころでは無い様だ。時として、種の存続をかけた戦いなのだから、我々人間から見るととても興味をそそられるものでも、本人（本草？）達にとっては、たぶん命がけなんだろう。

アレロパシー（Allelopathy）：他感作用

「他感作用」と呼ばれている、植物の持つこの能力は、「植物が放出する科学情報物質が、他の生物に、阻害的あるいは促進的に、何らかの作用を及ぼす現象」とされている。我が国においては、セイタカワダチソウによって他の草種が駆逐される事が良く知られており、沼田ら（1977）の報告によって一般的になった様である。特に、農業の分野において、農作物と雑草との相互間のアレロパシーが研究され、水田や畑での植物同士の熾烈な戦いが少しずつ分かり初めてきた。

我々の身近にある植物達のアレロパシーをいくつか紹介しよう。

①オオムギ：オオムギが放出するグラミン（アルカロイド）と言う物質によって、特にハコベの生育を強く阻害する。

②アカクローバ：アカクローバは繁殖力が強く、群落を作って雑草を寄せ付けない。その原因物質は、イソフラボノイドと言われている。

③クルミ：クルミの下には草が生えにくい事が知られており、クルミの樹皮や果実に1.4.5 －トリヒドロキシナフタレンが含まれており、これが酸化されてユグロンを生成するためであるとされている。

④エゴマ：エゴマに含まれる他感作用物質によって、イネ科雑草（ケイヌビエ、エノコログサ、メヒシバ）のかなり強度の生育阻害が確認された。

⑤その他アレロパシー活性が知られている主な雑草種（一部）

オオアレチノギク、ヒメジョオン、ハルジョオン、ヒメムカシヨモギ、ヨモギ、ブタクサ、ヤエムグラ、ハルタデ、スイバ、ヨウシュヤマゴボウ、ドクダミ、シロザ、スベリヒユ、クズ、ヤブガラシ、ヒガンバナ、アレチマツヨイグサ、エノコログサ、オヒシバ、メヒシバ、チガヤ、スズメノチャヒキ、ハマスゲ、スギナ等

今日分かっているのは、主に農耕地およびこれにかかわるものが中心であるが、将来において、より研究が進み、もっと多くのアレロパシー植物が明らかになってくると思われる。

雑草と呼ばれる植物たちも、それぞれ個性と独特の能力を持った固有名詞の植物であるはずが、我々人間が自分たちの都合だけで、「雑草」と言う言葉でくくってしまっている。雑草に言わせれば、きっと「ばっかやろー！人間人間と、でけい面するんじゃねーぜ。我々植物に食べさせてもらっているくせによー。」だろう。我々の全く知らない世界で、植物達がかくも熾烈な戦いを演じていた事は、そしてそういう能力を大なり小なり個々の植物達が持っていた事は、新しい驚きであると同時に、「命」と言うものの複雑さ、凄さ、妙、奥の深さ、etc、とにかく脱帽しました。

農業の分野では、農産物の収量の増減が、直接経済の状態を左右するため、雑草の研究についても、後発ではあるが近年はかなり進められてきている。これに対し、非農耕地や自然に生育する植物達についてはその経済効果が定量的に評価しにくいこととあいまって、まだほとんど何も分かっていないと言える。それだけに、研究が進むにしたがって、今後どんなに凄い事実が出てくるか全く分からない。目の玉が飛び出すような、とんでもない事が分かる可能性を多分に持っている。そんな植物達が送ってくれるサインを見逃さない様に、いつでもアンテナを傾けていたいと思う。

（株　グリーンシグマ）